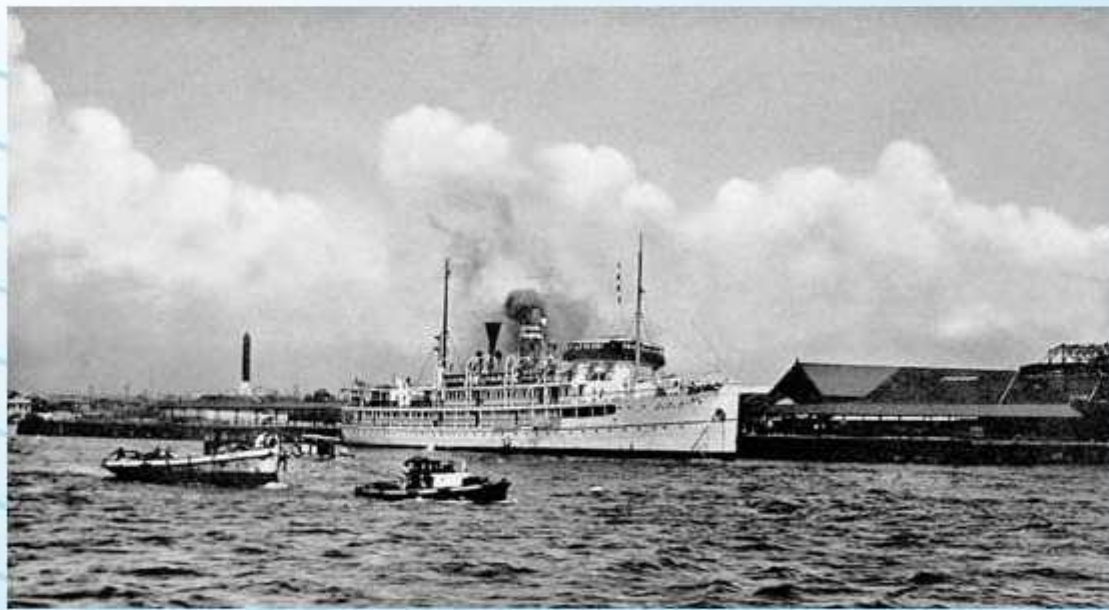


みなと 物語



大阪港の玄関口 天保山岸壁



内海航路旅客船の発着場 天保山棧橋完成(大正11年3月)
「大阪港のあゆみ」より

明治から大正にかけて国内航路の船舶の多くは川口波止場(西区)や築港大棧橋(現在の中央突堤の位置にあった鉄骨木造棧橋)などを利用していました。出入船舶数の増加から、築港埠頭地付近に港湾施設の整備が必要になりました。

大正11(1922)年3月、天保山の北側に天保山棧橋が新設され、内航客船の専用ターミナルとして四国、九州など各航路の客船で賑わいました。

しかし、長年の地盤沈下により台風の際に水禍に見舞われることなどもあって、昭和40(1965)年に安治川内港が完成すると、内航客船ターミナルは弁天埠頭(弁天6丁目)に移ることになりました。昭和40(1965)年6月30日、天保山発としては最終の観光船むらさき丸の船影が港外に消え、天保山棧橋は内航客船ターミナルとしての幕をひとまず閉じることになります。

その後天保山地区は、昭和45(1970)年の万国博覧会に向けて再整備され、主として沖縄定期航路の基地として活用されましたが、昭和53(1978)年に同航路がフェリー化され南港に移った後は利用が減少しました。一方、大阪港に寄航する外航客船は中央突堤北・南岸壁などを利用していましたが、施設や環境が不十分で利用も低調でした。そこで大阪港の玄関口として市民の知名度が高く、客船バースに適切な周辺環境を持つ天保山地区において国際港としての整備が図られました。こうして新生天保山岸壁は、昭和62(1987)年4月、外国客船の第1船としてソ連船・コンスタンチン・チェルネンコ号を迎え、翌年4月には豪華客船クイーンエリザベス2号が初入港しました。



昭和63年4月天保山岸壁へ初入港した豪華客船クイーンエリザベス2号
(港湾局提供)